

## J. マクマハンによる二重結果の原理の定式化を批判的に検討する

京都大学 石原諒太

### はじめに

「二重結果の原理 (The Doctrine of Double Effect、以下「DDE」)」は広義には、行為者の意図は行為の道徳的許容可能性にとって重要であるという発想を指し、この基本的な発想は先行研究において三つの仕方で定式化されてきた。そのうちの一つは狭義の二重結果の原理<sup>(1)</sup>であり (以下、この定式化を「DDE-T」<sup>(2)</sup>と呼ぶ)、この定式化は害の意図と単なる予見とを区別し、前者を禁止する。少なくとも一見したところでは DDE-T にはいくつかの利点があるように見えるが<sup>(3)</sup>、もし多くの行為から害の意図を取り去ってしまうほど厳密な意図の解釈が正しいのであれば、DDE-T は従来 DDE-T によって禁止されるとされてきたほとんどの行為を許容してしまうことになる。第 2 の定式化は、仮にこの十分厳密な意図の解釈が正しいとしてもこのような含意をもたないような定式化として、W.S.クインが提案したもの (以下、「DDE-Q」<sup>(4)</sup>と呼ぶ) である。ところが、J.マクマハンによれば DDE-Q にはいくつかの難点がある。そこで彼はそれらの難点を回避しつつも依然として DDE-Q の利点を保持するような定式化としてある定式化 (以下、「DDE-M」<sup>(5)</sup>と呼ぶ) を提示したが、これが第 3 の定式化である。

これら三つの定式化のうち前二者、つまり DDE-T と DDE-Q についてはすでに先行研究によって正しい定式化としての見込みが低いということが示されている<sup>(4)</sup>。ところが管見の限りでは、DDE-M が正しいのかは先行研究において明らかにされていない<sup>(5)</sup>。そこで本稿ではこの問いに取り組もうと思う。

本稿の構成は以下のとおりである。まず私は第 1 節および第 2 節において、DDE-Q と DDE-M の内容を説明するとともに、これら二つの定式化の比較を通して DDE-M を扱うことの意義を示す。次に第 3 節において、DDE-M は実は DDE-Q のある難点を引き継いでしまうということを示し、そこから DDE-M は見込みの低いものであると結論づける。最後に第 4 節では、私の議論に対するありうる反論を批判的に検討する。

### 1. W.S.クインの定式化とその利点および難点

本節では、DDE-Q の内容を説明し、その DDE-T に対する利点およびその難点を示す。このためにまず第 1 項では DDE-T の内容とその難点を述べる。そして次に第 2 項では DDE-Q の内容を説明し、最後に第 3 項では DDE-Q の DDE-T に対する利点とその難点を示す。

### 1-1. 従来 of 定式化とその難点

まず、DDE-T の内容を説明する。これは次のような主張である (Connell 1967, pp.1020-1; Mangan 1949, p.43)。

ある行為 A の主体は、A の結果として良い結果と悪い結果という二種類の結果が起こるということを予見しているとする。このとき、次の 4 つの条件が同時に満たされているならば、またその場合に限り、A は道徳的に許容可能である。

- (i) A そのものは道徳的に悪くない。
- (ii) 悪い結果は意図されていない。
- (iii) 良い結果は悪い結果によってもたらされていない。
- (iv) 良い結果は悪い結果の容認を埋め合わせるほど望ましい<sup>(6)</sup>。

この定式化によれば、予見された良い結果と悪い結果を伴う行為について、悪い結果の意図を含む行為はすべて道徳的に許容不可能であるが、悪い結果の予見しか含まない行為は必ずしも道徳的に許容不可能であるわけではない。

さて DDE-T には、一見したところは害の意図を含んでいるように見えるが実際にはそうではない、多くの道徳的に許容不可能な行為を許容してしまうという難点がある。例えば、R.マーティンの提示する次のような事例を考えてみよう (Martin 2001, p.282)。

「臓器移植の事例」：ある三人の患者 A、B、C にはそれぞれ、機能が失われつつある相異なる臓器があり、臓器移植が行われなければ死ぬ。ある罪のない患者 D は健康診断のために病院に来ており、診断の結果完全に健康だと判明する。だが、医者は看護師に D に全身麻酔を打つよう命じ、D が意識を失っている間に医者は D から A、B、C に必要な三つの健康な臓器を取り除き、A、B、C に移植する。この手術の予見された結果として、A、B、C は死なずに済むが D は死ぬ。D は、自分の臓器を移植されることに同意していない。また医者は、D は三つの臓器を失うならその結果として死ぬだろうと予見している<sup>(7)</sup>。

この事例の医者の行為は道徳的に許容不可能であるように思われる。だが、DDE-T はこの行為を許容してしまう。というのも、この行為は DDE-T の 4 条件をすべて満たすからである<sup>(8)</sup>。例えば、医者が意図していることは健康

な患者 D から三つの臓器を取り除くといったことにすぎず、医者は患者 D を死なせようとしているのではない<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>。そしてこのように DDE-T は、一見したところは害の意図を含んでいるように見える多くの道徳的に許容不可能な行為を許容してしまうように思われる<sup>(11)</sup>。

## 1-2. クインの定式化とはどのような定式化か

次に、DDE-Q の内容を説明しよう。DDE-Q は「有害な直接的働き (harmful direct agency)」と「有害な間接的働き (harmful indirect agency)」という二種類の行為 (以下、それぞれ「有害な直接的行為」と「有害な間接的行為」と呼ぶ) を区別する (Quinn 1989, p.343)。そこでまずはこれらの行為の説明から始めよう。

まず、「有害な直接的行為」は次のように定義される (Quinn 1989, p.343)。

「有害な直接的行為」

: ある行為 A は、次のとき、かつそのときに限り、有害な直接的行為である。

ある人 (々) S と、S についてのある事態 F について、

- (1) A の結果として F が引き起こされ、
- (2) F の結果として、S は害を被り、
- (3) A の主体は、A の結果として S は害を被る、ということを見しており、しかも
- (4) A の主体は、何らかの目的のための手段として、F の実現を意図している。

例えば「臓器移植の事例」では害そのものは意図されていなかったが、患者 D が三つの臓器を失うという、害の一步手前の事態は意図されていた。そしてこのような、害の一步手前の事態の意図に焦点を当てるのが、有害な直接的行為である。

そして、有害な間接的行為とは、ある人 (々) に対して有害ではあるものの、その人 (々) について (1) から (4) を同時に満たさないような行為のことである (Quinn 1989, p.343)。

すでに述べたように、DDE-Q はこれら二種類の行為を区別する。しかしより明確には DDE-Q はどのように理解すべきだろうか。クインの記述を踏まえるなら、この点については次のように推測することができる。

先取りして言えば、DDE-Q にはある二つの要素がある。第一の要素は、

(Quinn 1989, Section III) で提示される例外を除き原則的には DDE-Q は有害な直接的行為を総じて非難するというものである。(Quinn 1989, Section II) で提示された新しい定式化に対していくつかの「例外」(Quinn 1989, p.345) を導入する文脈で、クインは次のように言う。「特別な権利は、私たちが直接的な働き (direct agency) によって [……] ある人の諸利益を害するのを許すことがある」(Quinn 1989, pp.344-5)。ここでのポイントは、このことが例外として導入されていることである。ここからは、(Quinn 1989, Section III) で例外が導入される以前の段階では、DDE-Q は有害な直接的行為を総じて非難し、このようにして行為者に特別な権利がある場合でさえ有害な直接的行為を非難すると推測できる。そしてそうであれば、DDE-Q は原則的には有害な直接的行為を総じて非難すると言えるだろう。このようにして DDE-Q は、「各人に、その人を犠牲にして世界をより良い場所にしようというある種の企てに対する拒否権を与える」(Quinn 1989, p.351) ののである。

しかしクインによると、「独立の消極的ないし積極的な権利が一切存在しない場合にも DDE は働く」(Quinn 1989, p.346) わけではない (Quinn 1989, p.346)。つまりそのような場合には、DDE-Q は「有害な直接的働きを冷遇する (discriminates against)」(Quinn 1989, p.345) ことはないのであり、これらの行為は許容されることになる。そしてこれが第二の要素である。

まとめよう。DDE-Q によれば、有害な直接的行為は原則的には道徳的に許容不可能である。ただし、害を被る人 (々) の消極的ないし積極的な権利が一切侵害されていない場合には、有害な直接的行為は道徳的に許容可能である<sup>(12)</sup>。

### 1-3. クインの定式化の利点と難点

さて、DDE-Q であれば先に指摘した DDE-T の難点をうまく回避できるように思われる。例えば、DDE-Q は「臓器移植の事例」における医者行為を非難できる<sup>(13)</sup>。というのも、医者行為は有害な直接的行為であり<sup>(14)</sup>、さらに患者 D の殺されない権利を侵害しているからである。

ところが、DDE-Q には難点もある。例えば、J.マクマハンの提示する次のような事例を考えてみよう (McMahan 1994, p.206)。

「事故の被害者」:ある通行人が事故の場面に偶然出会う。この通行人は、5分以内に応急手当が行われないう限り事故の被害者は24時間以内に確実に死ぬだろうということを知るが、被害者がドナーカードを携帯していることに気づいて助けを与えないことに決める。というのも、この通

行人には臓器移植が必要な2人の友人が病院におり、この通行人は、もし自分が応急手当を行わないでその代わりに救急車を呼びに行くなら、被害者の臓器を友人たちへの移植のために用いるのが可能なほど被害者は生き延びるだろう——だが、それほどのあいだしか生き延びないだろう——と判断するからである。

この事例の通行人の行為は道徳的に許容不可能であるように思われる。だがマクマハンが主張するように (McMahan 1994, p.207)、DDE-Qはこの行為を許容してしまう。というのも、この行為は有害な直接的行為ではあるものの、消極的な権利も積極的な権利も侵害しないからである<sup>(15)</sup>。したがって、DDE-Qにも難点があるように思われる。

## 2. J.マクマハンの定式化とその利点

本節では、DDE-Mに焦点を当てる。まず第1項ではDDE-Mの内容を説明し、次に第2項ではこの定式化の利点を指摘する。

### 2-1. マクマハンの定式化とはどのような定式化か

まず、DDE-Mの内容を説明しよう。この定式化は、「潜在的に有害な直接的働き (potentially harmful direct agency)」と「潜在的に有害な間接的働き (potentially harmful indirect agency)」という二種類の行為 (以下、それぞれ「PHDA」と「PHIA」と呼ぶ) を区別する (McMahan 1994, p.210)。そこでまずはこれらの行為の説明から始めよう。

まず、PHDAは次のように定義できる (McMahan 1994, pp.209-11) <sup>(16)</sup>。

#### 「PHDA」

：ある行為 A は、次のとき、かつそのときに限り、PHDA である。

ある予見された結果 E について、また、ある人 (々) P について、

- (1) A の主体は E の実現を意図しており、
- (2) E は、P についての結果であり、しかも
- (3) 次の (a) から (d) のうち少なくともひとつが真である。
  - (a) E は、P にとってそれ自体で悪い。
  - (b) E は、P にとってそれ自体で悪いある結果と同一であると、A の主体によって信じられている。
  - (c) E は、P にとってそれ自体でかなり悪い事態が生じるのに当の状況においては因果的に十分であると、A の主体

によって信じられている。

- (d) E は、P にとってそれ自体でかなり悪い事態が起こることの高い蓋然性が生じるのに当の状況においては因果的に十分であると、A の主体によって信じられている。

そして PHIA とは、ある人（々）とある予見された結果とについて上記の（1）と（3）を同時に満たすという意味で潜在的に有害であるが、その人（々）については、いかなる予見された結果についても（1）から（3）を同時に満たすことはないような行為である。言い換えれば、ある人（々）に対して潜在的に有害であるが、その人（々）に対して PHDA ではないとき、当の行為は PHIA である。

次に DDE-M の内容に移ろう。先取りして言えば、DDE-M にはある二つの要素がある。第一の要素は、PHDA を非難するというものである。このことは例えば、「それ〔例外が導入される前の DDE-M〕は、裕福なおじ2〔という事例〕における行為者の行為を、直接的な働きとして非難する」(McMahan 1994, p.210、〔〕内と強調は引用者) という箇所から示唆されている。

そして第二の要素は、この非難には例外があるというものである。つまり、「意図が通常はもっている重要性を無効にする」(McMahan 1994, p.211) 要素、すなわち「無効化因子 (nullifier)」(McMahan 1994, p.211) が存在している場合には、DDE-M は PHDA を許容するのである (McMahan 1994, p.211)。マクマハンは無効化因子として三つの要素を挙げており、これらは道徳的な義務の意図、同意、そして道徳的に潔白でないことという要素である (McMahan 1994, p.211)。言い換えれば、ある行為 A は PHDA であり、しかも次の 3 つの条件 ( $\alpha$ )、( $\beta$ )、( $\gamma$ ) のうち少なくともひとつを満たすとき、DDE-M は行為 A を許容する。

( $\alpha$ ) A の主体は、A の結果として害を被る人（々）に、その人（々）の道徳的な義務であることを行わせることを意図している。

( $\beta$ ) A の結果として害を被る人（々）は、A の主体が A を行うことに同意している。

( $\gamma$ ) A の結果として害を被る人（々）は、道徳的に罪を犯している。

まとめると、DDE-M によれば、三つの無効化因子のうちどれか一つでも存在している場合には PHDA は道徳的に許容可能である。だがその他の場合には、PHDA は道徳的に許容不可能である。

## 2-2. マクマハンの定式化にはどのような利点があるのか

さて、DDE-M は、DDE-T に対する DDE-Q の利点を引き継いでいる一方で、DDE-Q の難点も回避できる。以下ではこのことを示そう。

まず、DDE-M もまた、1-1 節で指摘した DDE-T の難点をうまく回避できるように思われる。例えば、DDE-M は「臓器移植の事例」における医師の行為を非難できる<sup>(17)</sup>。というのも、医師の行為は PHDA であり<sup>(18)</sup>、しかも三つの無効化因子は欠けているからである。

次に、DDE-M であれば「事故の被害者」における通行人の行為を許容せずに済む。というのも、通行人の行為は PHDA であり、さらに三つの無効化因子は欠けているからである<sup>(19)</sup>。

以上より、DDE-M は DDE-T に対する DDE-Q の利点を引き継ぎつつ、DDE-Q の難点を回避できるように思われる。さらに、DDE-M は多くの場合にもっともらしい含意を有している<sup>(20)</sup>。そうであれば、少なくともこの段階では DDE-M は正しい定式化としての見込みの高い定式化であると言えるだろう。だが、実は DDE-M は DDE-Q が抱えているある難点を引き継いでしまう。次節ではこのことを示し、それにより DDE-M は見込みの低いものであるということを示そう。

## 3. マクマハンの定式化の批判的検討

本節ではまず、DDE-Q はすでに指摘した難点のほかにもある別の難点を抱えているということを示す（第1項）。そして次に、DDE-M はこの難点を引き継いでしまうということを示し、そしてここから、DDE-M は正しい定式化としての見込みの低いものであると結論づける（第2項）。

### 3-1. クインの定式化が抱えるある別の難点

本項では、DDE-Q が抱えているある別の難点を示す。例えば次のような事例を考えてみよう。

「タライスイッチの事例」：サトルという罪のない人、タケシという凶悪犯罪者、アスカという通りすがりの人の三人がいる。サトルの頭上にはタライがぶら下がっており、あるスイッチを押すことで、サトルの頭上にタライを落とすことができる。タケシはサトルのことを嫌っており、100万人の人を人質にとりアスカに次のように言う。「もしサトルが5分以内に何らかの苦痛を被らなければ、私は100万人の人質を全員殺す。

だが、彼が 5 分以内に何らかの苦痛を被るなら 100 万人の人質は全員解放する」。アスカは 100 万人の人の命を救おうと決心する。そして彼女は、もし自分がタライのスイッチを押せば、その結果としてサトルの頭上にタライが落ち、さらにその結果としてサトルが極めて小さな苦痛を被り、さらにその結果としてサトルはそれにふさわしい反応をとり、さらにその結果としてタケシはサトルが何らかの苦痛を被ったと判断し、さらにその結果として 100 万人の人は解放され死なないで済むだろう、と判断し、タライのスイッチを押す。サトルは、自分の頭上にタライを落とされることに同意してはいない。またアスカは、タライのスイッチを押す以外には 100 万人の人の命を救う方法はないだろうと合理的に判断している。

スイッチを押すというアスカの行為は、道徳的に許容可能であるように思われる。だが、DDE-Q はこの行為を非難してしまう。というのも、この行為は消極的ないし積極的な道徳的権利を侵害している有害な直接的行為だからである。

第一に、アスカの行為は有害な直接的行為である。まず、アスカの行為の結果として、サトルの頭上にタライが落ちる。次に、アスカは 100 万人の人の命を救うためにサトルの頭上にタライを落とそうとしている。そして最後に、タライが落ちることの予見された結果として、サトルは極めて小さな苦痛を被る。したがって、アスカの行為は有害な直接的行為であると考えられる。

第二に、アスカの行為は消極的ないし積極的な道徳的権利を侵害している。というのも、アスカの行為によって、同意なしに危害を加えられないサトルの権利が侵害されているからである。

したがって、DDE-Q はアスカの行為を非難してしまうように思われる。

### 3-2. 前項で指摘されたクインの定式化の難点をマクマハンの定式化は回避しうるか

前項で論じたように、DDE-Q はアスカの行為を非難してしまう。本項では、DDE-M はこの DDE-Q の難点を引き継いでしまうのかを考察しよう。

結論から言えば、DDE-M はこの難点を引き継いでしまう。なぜなら、アスカの行為は PHDA であり、しかも三つの無効化因子は存在しないからである。

第一に、アスカの行為は PHDA である。まず、アスカはサトルが極めて小



さな苦痛を被るという予見された結果の実現を意図している。次に、この結果はサトルについてのものであり、さらにサトルにとってそれ自体で悪い。したがって、当の行為は PHDA であると考えられる。

第二に、三つの無効化因子はどれも欠けている。順に確認しよう。まず、道徳的な義務の意図という要素は存在していないように思われる。なぜなら、仮にその要素が存在しているならアスカはサトルに何らかの行為を行わせようとしていることになるが、そうではないからである。さらに事例の設定より、同意という要素も道徳的に潔白でないという要素も存在していない。したがって、三つの無効化因子はどれも欠けているように思われる。

したがって、DDE-M は前項で示した DDE-Q の難点を引き継いでしまうように思われる。それゆえ、DDE-M は正しい定式化としての見込みの低いものであるように思われる。

#### 4. ありうる反論への応答

だが、以上の議論に対しては次のような反論がありうるかもしれない。DDE-M は実際にはいわゆる「比較の原理」(Fischer et al. 2001, p.199)であり、具体的には、〈他の事情が等しければ、PHDA は PHIA よりも正当化が難しい〉という原理である。したがって、DDE-M は行為の道徳的許容可能性については何も含意しておらず、それゆえアスカの行為を非難することはない。

この反論に対しては次の二つの応答が可能である。第一に、そもそも DDE-M は比較の原理としては解釈できない。確かに、「このバージョン [= DDE-M] の中心的な主張は、潜在的に有害な間接的働きに反対する道徳的な論拠 (presumption) よりも、[……] 潜在的に有害な直接的働きに反対するより強い道徳的な論拠がある、という主張である」とマクマハン述べており (McMahan 1994, p.210、[] 内は引用者)、この点を鑑みるなら、DDE-M は比較の原理であるように見える。しかし、もし DDE-M が比較の原理だとすると、DDE-M は行為の道徳的許容可能性については何も含意しないことになるだろう。だが、2-1 節で DDE-M の第一の要素との関連で引用した箇所 (McMahan 1994, p.210) を踏まえるなら、DDE-M は行為の道徳的許容可能性について何らかの含意を有しているように思われる。そうであれば、比較の原理として DDE-M を解釈することはもっともらしくないように思われる。

第二に、仮に上の反論がうまくいっているとしてもそれは本稿の結論には何の影響も与えないように思われる。議論のために DDE-M は比較の原理で

あるとしてみよう。いま直面している課題は、他の事情は等しいが、〈前者は後者よりも正当化が難しい〉という命題が偽となるような、PHDA と PHIA のペアを見つけることである。

そこで次のような状況を考えてみよう。「タライスイッチの事例」の場合と同様にサトルの頭上にはタライがぶら下がっており、あるスイッチを押すことでサトルの頭上にタライを落とすことができる。だが今度はサトルはかなり重度の血友病患者であり、サトルの頭上にタライが落ちればサトルは大量出血により死ぬ（そしてアスカはこのことを知っている）<sup>(21)</sup>。

このとき次の二つのケースを考えてみよう。第一のケースではタケシはアスカに次のように言う。「もし 5 分以内にタライが落ちなければ私は 100 万人の人質を全員殺す。だが 5 分以内にタライが落ちれば彼らは全員解放する」。アスカは、スイッチを押したらタライが落ち、100 万人の命は救われるだろうと考え、スイッチを押す。

第二のケースでは、タケシはアスカに次のように言う。「もし 5 分以内にサトルの頭上にタライが落ちなければ私は 100 万人の人質を全員殺す。だが 5 分以内にサトルの頭上にタライが落ちれば彼らは全員解放する」。アスカは、スイッチを押したらサトルの頭上にタライが落ち、100 万人の命は救われるだろうと考え、スイッチを押す。

さて、第一のケースのアスカの行為は（単なる）PHIA である。というのも、この行為においてはサトルについては何も意図されていないからである。他方、第二のケースのアスカの行為は PHDA である。というのも、アスカはサトルの頭上にタライを落とそうとしているが、アスカはこの結果としてサトルが死ぬだろうと予見しているからである。2-1 節で提示した PHDA の定義に照らして言えば、第二のケースでは、「予見された結果 E」には〈サトルの頭上にタライが落ちる〉という結果が入り、この結果とサトルとについて、PHDA の条件（1）、（2）、そして（3）の（c）が満たされている。他方で第一のケースでは、この結果については条件（1）が満たされておらず、また、〈タライが落ちる〉という結果はサトルについてのものではないため、このケースでのアスカの行為は PHDA ではなく（単なる）PHIA ということになる。

しかし、これらの行為の正当化の困難さは同程度であるように思われる。もし正当化の困難さの程度に違いがあるなら、その違いを正当化するさらなる違いがあるはずである。だがこのようなさらなる違いはないように思われる。というのもこれらの行為の相違点は、タライを落とそうとしているか、それともサトルの頭上にタライを落とそうとしているかということにすぎな

いからである。それゆえ、これらの行為の正当化の困難さは同程度であるように思われる。

したがって、仮に上の反論が有効であるとしても、DDE-M は正しい定式化としての見込みの低いものであるという結論は変わらないように思われる。

もちろんこの第二の応答に対しては、上のアスカの行為ペアは「他の事情が等しければ」という条件を満たさないのではないかという反論が予想される。というのも、このペアに属する二つの行為の間では、例えば行為の状況は異なるだろうからである。しかし、この反論はうまくいっていないと私は考える。というのも、この反論は「他の事情が等しければ」という条件の狭い理解を前提としているが、このような理解は適切ではないからである。

上の反論がうまくいくためには、「他の事情が等しければ」という条件は、上のアスカの行為ペアがこの条件を満たさなくなるほど狭く理解される必要がある。このような狭い理解としては例えば、意図以外のあらゆる事情の等しさとしての理解や、意図以外の心的状態の等しさとしての理解、そして行為の状況の等しさとしての理解が挙げられるだろう。しかしもし当の条件がこのように狭く理解されるなら、DDE-M はマクマハンがこの定式化に帰す利点の一つを失うことになる。

彼によると、DDE-Mには「クインの説明がもつ利点を保持する」(McMahan 1994, p.201) という利点がある。これは具体的には、「従来の DDE が描くために用いられてきた道徳的区別を描き続けつつも、何が意図された手段とみなされるかについての非常にきめ細かな考えを我々が受け入れられるようにする」(McMahan 1994, p.204) という DDE-Q の利点を保持するという利点である。「従来の DDE が描くために用いられてきた道徳的区別」とは例えば、テロ爆撃手 (Terror Bomber) と戦略的爆撃手 (Strategic Bomber) との区別や、頭蓋骨粉砕手術 (Craniotomy) と子宮摘出手術 (Hysterectomy) との区別であり<sup>(22)</sup>、DDE-Q はそもそもこのような区別を描くために提案されている (Quinn 1989, pp.334-44)。

しかし、頭蓋骨粉砕手術と子宮摘出手術とのペアが示すように、これらの行為ペアは意図以外の心的状態や行為の状況について必ずしも等しいわけではない。それゆえ、先に挙げた三つの狭い理解では、DDE-M はこうした利点を失うことになるだろう。そしてこのように、もし「他の事情が等しければ」という条件が狭く理解されるなら、DDE-M はマクマハンがこの定式化に帰す利点の一つを失うことになる<sup>(23)</sup>。

したがって、「他の事情が等しければ」という条件は狭く理解されるべきではなく、それゆえ先の反論はうまくいっていないと言える。むしろこの条件

は、例えば結果の等しさとして広く理解すべきだろう。

### おわりに

DDE-Mは正しいのか。この問いに答えるために、まず私はDDE-MはDDE-Qのある難点を引き継いでしまうということを示した。具体的に言えば、DDE-MはDDE-Qと同様に、「タライスイッチの事例」におけるアスカの行為を非難してしまうのである。そしてここから、私はDDE-Mは正しい定式化としての見込みの低いものであると結論づけた。

以上の議論、とりわけ第3節での議論から示唆されるのは、意図の重要性は害そのものの大きさにも左右されるという考えである。この考えを踏まえればDDEは適切に定式化されうると私は考えているが、この点については別稿に委ねたい。

### 注

(1) この原理の起源は通常、トマス・アクィナス『神学大全』第二―二部第六十四問題第七項の自己防衛における殺人についての議論まで遡って求められる(トマス 1985, pp.179-183)。詳細については(Cavanaugh 2006, pp.1-37; Mangan 1949, pp.43-52)を参照。

(2) 「DDE-T」の「T」は、この定式化の提唱者とされるトマス・アクィナスにちなんでいる。また、以下の「DDE-Q」の「Q」はW.S.クインに、「DDE-M」の「M」はJ.マクマハンにちなんでいる。

(3) 例えば(McIntyre 2018, Section 2; Quinn 1989, p.336)を参照。

(4) DDE-Tについては例えば(Foot 2001, p.152; Martin 2001, pp.281-4)を、DDE-Qについては例えば(FitzPatrick 2006, pp.612-3; Kamm 1992, pp.377-81; McMahan 1994, pp.206-8)を参照。

(5) 私の知る限りでは、DDE-Mを扱っているのはDDE-Mは二重結果の原理の一バージョンではないと論じた(Mapel 2001)のみである。だが、一つにはDDE支持者の直観は必ずしも信頼できるものではないため、この論文はDDE-Mが正しいのかを明らかにしてはいないように思われる。

(6) 本稿では便宜上、DDE-Tにおける「悪い結果」を〈ある人にとってそれ自体で悪い結果〉と理解している。これは一つには、この「悪い結果」を悪い結果一般と理解すると、DDE-Tは戦略的爆撃手(Strategic Bomber)の爆撃や子宮摘出手術(Hysterectomy)といった一般にDDE-Tが許容するとみなされている行為を禁止することになるからである。したがって、本稿1-1節で問題となる定式化は、正確にはDDE-Tの一バージョンである。

(7) 患者 D の同意の不在と罪のなさの想定、および医者の子見についての想定は本稿 2-2 節での議論のために筆者が補った。

(8) 詳細については (Martin 2001, p.282) を参照。

(9) 「意図の厳密な定義 (The strict definition of intention)」によると、患者 D の死は意図されていないということになる。この定義の内容と擁護については (Masek 2010, pp.569-75) を参照。以下の意図に関する私の主張は、すべてこの定義 (と本稿の事例の設定) に基づいている。

(10) この議論に対しては、臓器の喪失は悪い結果ではないのかという反論が予想される。確かに臓器の喪失は何らかの意味では悪い結果かもしれないが、〈ある人にとってそれ自体で悪い結果〉という本稿の意味ではそうではないだろう。注 (6) も参照。

(11) この難点を示す他の事例には、(Quinn 1989, p.336) で提示される「モルモットの事例」や (Foot 2001, p.145) で提示される洞窟探検家の事例などがある。

(12) 正確に言えばクインは消極的ないし積極的な権利が一切侵害されていない場合以外にもいくつか例外を導入しているが (Quinn 1989, pp.344-7)、ここでは煩雑さを避けるためこれらの例外はすべて無視している。だが、これらの例外を踏まえたとしても依然として本稿の議論は成立すると私は考えている。

(13) 注 (11) で言及した「モルモットの事例」などについても同様のことが言える。(Quinn 1989, pp.341-3) などを参照。

(14) この場合、有害な直接的行為の「事態 F」に当たるのは、患者 D が三つの臓器を失うという事態であり、その結果として D の身体は機能不全を起し D は死ぬ。

(15) 詳細な議論については (McMahan 1994, pp.206-8) を参照。

(16) もちろん、(McMahan 1994, pp.209-10) で提示される条件は十分条件である。しかし、マクマハンはこの条件を「定義 (definition)」と呼んでおり (McMahan 1994, pp.210-1)、そのため彼はこの条件を必要十分条件とみなしているように思われる。

(17) 注 (11) で言及した「モルモットの事例」などについても同様のことが言える。

(18) この場合 PHDA の「予見された結果 E」に相当するのは、患者 D が三つの臓器を失うという D についての結果であり、この結果について PHDA の定義の条件 (c) が満たされている。

(19) 詳細な議論については (McMahan 1994, p.210) を参照。

(20) 例えば (McMahan 1994, pp.210-1) を参照。

(21) このようにサトルが被る害を極めて小さな苦痛から死に変更したのは、以前のようにサトルが被る害が極めて小さな苦痛だとすると、以下の第二のケースでのアスカの行為は PHDA の定義の条件 (c) を満たさなくなり、その結果 PHDA ではなくなるからである。というのも、極めて小さな苦痛はサトルにとってそれ自体でかなり悪い事態ではないからである。

(22) これらの区別については (Quinn 1989, p.336) を参照。

(23) もしこの前提に対して反例、すなわち上述した DDE-M の利点を損なわないような狭い理解を挙げることができないなら、この前提は受け入れざるを得ないだろう。

## 文献表

- トマス・アクィナス (稲垣良典訳) (1985) 『神学大全』、第 18 冊、創文社。
- Cavanaugh, T.A., 2006, *Double-Effect Reasoning*, Oxford University Press.
- Connell, F.J., 1967, “Double Effect, Principle of”, pp.1020-2 in *New Catholic Encyclopedia*, Vol. 4, edited by The Catholic University of America. McGraw-Hill.
- Fischer, John Martin, Ravizza, Mark, and Copp, David, 2001, “Quinn on Double Effect: The Problem of ‘Closeness’”, pp. 189-210 in *The Doctrine of Double Effect*, edited by P.A.Woodward. University of Notre Dame Press.
- FitzPatrick, W.J., 2006, “The Intend/Foresee Distinction and the Problem of ‘Closeness’”, *Philosophical Studies* 128, 585-617.
- Foot, Philippa, 2001, “The Problem of Abortion and the Doctrine of the Double Effect”, pp.143-55 in *The Doctrine of Double Effect*, edited by P.A.Woodward. University of Notre Dame Press.
- Kamm, F.M., 1992, “Non-Consequentialism, the Person as an End-in-Itself, and the Significance of Status”, *Philosophy & Public Affairs* 21, 354-89.
- Mangan, Joseph T., 1949, “An Historical Analysis of the Principle of Double Effect”, *Theological Studies* 10, 41-61.
- Mapel, David R., 2001, “Revising the Doctrine of Double Effect”, *Journal of Applied Philosophy* 18, 257-72.
- Martin, Robert M., 2001, “Suicide and Self-sacrifice”, pp.270-88 in *The Doctrine of Double Effect*, edited by P.A.Woodward. University of

Notre Dame Press.

Masek, L., 2010, “Intentions, Motives and the Doctrine of Double Effect”,  
*The Philosophical Quarterly* 60, 567-85.

McIntyre, Alison, 2018, December 24, "Doctrine of Double Effect", in *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2019 Edition), edited by Edward N. Zalta. The Metaphysics Research Lab, Stanford University.  
<https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/double-effect/>  
(accessed 23 August 2020).

McMahan, J., 1994, “Revising the Doctrine of Double Effect”, *Journal of Applied Philosophy* 11, 201-12.

Quinn, Warren S., 1989, “Action, Intentions, and Consequences: The Doctrine of Double Effect”, *Philosophy and Public Affairs* 18, 334-51.